

幼児教育者の主体性

哲学の最後のことばは教育学であるといわれるが、教育学の最後のことばは教育者であるといえる。保育所や幼稚園の教育は、家庭教育とちがって、組織された教育環境のなかで行なわれる計画的な教育である。しかもそのような組織のなかで、実際に計画を運んでいくのは保母や教師その人である。したがっていかにその組織や計画が理想的にできていても、これを運営する教育者その人をうるることができなければ、教育の効果はあがらない。幼稚園の創立者フリードリヒ・フレーベルこそ、幼児教育者の養成を第一に考えた先覚者である。フレーベルの影響を受けたジョン・デューイも、アメリカの教育組織や教育環境が次第に理想的に整いつつあるのを見て喜びながらも、なお教師の重要性を強調した人である。

デューイは、アメリカのこの理想的な組織を、優秀な人材

莊 司 雅 子



でみたし、この組織のなかで、また、この組織のために力強く活動してくれる優秀な男性や女性がいられるならば、一世代もしくは二世代で、アメリカは世界の教育を十分指導することができると主張した。こうしたデューイのことば通り、アメリカは世界のいずれの国よりも教師の養成に力をそそぎ、特に、今まで看過されていた保育所や幼稚園の教師の養成にとめていることはよく知られている。幼稚園の教師は小学校教師と同じく四年制大学で養成され、卒業生は小学校教師と同じ待遇を受けている。更に大学院に進んで幼児教育の修士課程を履修してから幼稚園の教師になっているものも少なくない。また幼児教育で教育学博士の学位をもらったからといって驚くこともない。世界各国にくらべて、アメリカが歴史的には最も早くから幼児教育が普及され発展された国である。アメリカの幼稚園の歴史は、ビーボリー女史

がボストンにフレール幼稚園を創設したことに始まるのであるが、まもなくセントルイスに公立幼稚園ができ、次第に全国的に普及され、小学校に幼稚園が附設されるようになった。今日、アメリカの小学校を訪問すれば、幼稚園が見られ、幼稚園を訪問したいならば小学校に行けばよい。もちろん小学校附設の幼稚園は四、五歳児の一年か二年保育が多い。そして、幼稚園と小学校の低学年とは一連の幼年期教育を行ない、幼・小低学年の教師はこの幼年期の教育を専攻したものがあたることになっている。つまり専門職になっている。しかも教師は社会の変化に応じてたえず教育の方法や内容を研究し、それを発展させなければならない。そのため教師は常に勉強を要求される。大学を出た時の免許状は永久に有効のものではなく、一定の期間内には更新のための勉強が必要になっている。その代り、各大学はこれらの現場の教師の再教育の機会を用意している。どの大学も夏休みに免許状や修士の単位の履習を希望する幼・小の教師のために、授業を公開している。

私はさる八月下旬ジュネーブにおける国際大学婦人協会の研究集会と、九月上旬パリで開かれた国際教育研究推進会議に出席するため、アメリカを廻ってヨーロッパに行った。ちょうど夏休みであったが、アメリカでは、カリフォルニア州

にあるパンフィック・オークスカレッジとインディアナ州立大学の教育学部のサマーセッションを視察することができた。いずれも主として現場の保育所や幼稚園の先生が、資格や学位をとるための勉強に来ている。ここで特に印象的であったのは、学生たちが単に教室で講義を聴講し、そして後でレポートを出して単位をとるといった、頭だけきたえる授業ではなかったことである。製作の授業だっと思うが、学生の一人一人がそれぞれに幼稚園の屋外の模型を一生懸命につくっていた。それぞれ創意工夫をこらして、夢中になっている。つまり幼児教育の理論をどのように実践にうつすかという訓練である。幼児の身体をきたえるためにはどういう環境が必要であるか、また必要であるにしても、それは教師のほうできたえるのでなく、幼児の一人一人が自分の発達速度できたえられるような環境でなければならぬ。それはどういう型のものでなければならぬか、また幼児が自分自身できたえるためには、幼児がそれに興味をもち、関心を寄せるのでなければならぬ。それにはどういふ種類の運動道具と遊具が適当であるか、またそれを設備するにはどうすればよいか。また幼児は遊びを通して身体をきたえているが、身体をきたえながらまた物をおぼえたり、ことを習ったり、数をかぞえたりしている。つまり幼児は運動や遊びのうちを知

識や個性や社会性をつちかっている。そうした原理をふまえなければ幼児のための環境づくりはできない。

私がさきあげた大学のサマーセッション（夏期講座）に学生たちが聴講した原理を実践にうつすための訓練をうけているわけである。この学生（現場の先生方）たちはやがてまた現場にもどり、そして幼児のために環境を改めたり、幼児のために自分で更に新しい環境をつくったりしている。このような幼児教育者であれば、幼児を保育するにも、ただことばで教えたり、歌を教えたり、描画を教えたり、製作を教えたりすることはしないであろう。どうすれば、幼児が自分で考え、自分で工夫してものをつくり、ものを描くかをまず問題にするであろう。

インディアナ州立大学だけでなくパシフィック・オークス・カレッジを見ても、学生のためのいわゆる単なる講義室だけではなく、いずれの部屋も学生がそこで自分で学習し、製作し、描画し、実践する環境である。そして幼稚園が付設されているから、学習したことをすぐに実習でき、幼児の観察もすぐできるようになっている。この幼稚園は屋外保育に重点をおいていると見えて、実に大規模な遊具や、運動道具、広い砂場、自然の樹を利用しての樹上の遊び場、大きなトンネルなどといった種類のものである。これらの環境から

みても、わたしたちの保育のように幼児を時間割でしめつけ、六領域で学習させているのではないことがわかる。

この種の幼児教育はヨーロッパでも見られる。パリでの国際会議のあと、私は更に教カ国を廻った。西ドイツのブレームンの公立幼稚園、コペンハーゲンの公立保育所を見た。九月中旬でいずれも新学期の保育が始まっていた。幼児たちは用意された屋外や屋内の教育環境の中で幸せそのもののように楽しそうに生活している。わたしたちの幼稚園や保育所のように、ときどき泣く幼児はほとんどない。先生方はゆうゆうとふるまっている。幼児をかりたててすることはしない。それでいて幼児はよく考え、自分で行動している。教師は助言者である。教師がカリキュラムによってしぼられ、つくられた時間割に即して、一分もくすすことなく、幼児をあつちに廻し、こつちに引き入れ、まるで小さい兵隊の訓練を思わせるような場面がない。教師はカリキュラムに動かされるのではなく、カリキュラムを主体的に創造的に動かしていくのである。保育内容の六領域にしばられ、たとえば今は言語の時間だからお話をなくてはならないとか、今は音楽リズムの時間だから、お話をしただす幼児をけんせいしなければならぬとか、今は絵画製作だから、植木鉢をじっと観察している幼児を無理矢理に引っぱってきて、みんなと同じ絵を描かさなけ

ればならないとか、また屋外での自然観察だからといって、見つけた自然物で何かをつくろうと熱心になっている幼児を、無理にやめさせたりしなければならぬとか……。そういったようなことは、主体的な幼児教育者のなすべき保育ではないであろう。主体的な幼児教育者は、保育内容を流動的にダイナミックに、総合的に保育のなかに流し込むであろう。

主体的な幼児教育者は保育の流れを主体的に運ぶだけではなくて、クラスを環境をどう整備すればよいかについても工夫するのである。アメリカやイギリス、ドイツやスイスおよび北欧などの国々で、私が訪問したかぎりの幼稚園や保育所のクラスを見ると、それぞれいづれもきわめて個性的である。それを運ぶ教師の主体性によって環境が整えられているからである。教師の個性がそのクラスの個性をあらわすからである。教師が個人的に旅行先で集めてきためずらしい木の実や貝殻や植物などが窓側にあたり、母親に協力してもらってつくった玩具があったりして、クラスはきわめて多彩的である。こういうことは、幼児教育者自身が、幼児期の教育はこうであり、こうでなければならぬといったしっかりした教育と自信と信念とがあつてはじめてできることである。つまり、幼児教育に対して主体性をもつ教師にしてはじめてできることである。

では以上のような主体性ある幼児教育者はどうすれば生まれてくるのであろうか。まず第一に、今日幼稚園や保育所の教師養成機関の根本的な改善が必要であるということである。次には今日現場にあるすべての幼児教育者の再教育である。それも従来行なわれているように、民間にたよって行なってきた数日間の夏期講習会のようなものであったり、一時的な講演会のようなものであったりしてはあまり効果はない。もちろん、無いよりはましで、それは従来通りに大いにやってもらうとよいが、問題はこのようなはなやかな一時的な花火式の再教育では、真に自信のある主体性のある幼児教育者は育たない。もっと国や地方自治体や各大学が、組織的に幼・保の教師の再教育に取り組んでもらわなくてはならないと思う。文部省は目下、幼児期の義務教育を実施するよりもまず、こうした幼児教育者の再教育を計画し、すべての教師に機会を与え、そのための予算を組み、実行するように努めるべきである。そしてこれこそが今日のわが国の幼児教育界の問題を解決するための焦眉の急を要する問題ではないだろうか。義務教育は実施したものの、そのための幼児教育者がいなくてはかえって幼児期の教育をゆがめてしまう。

(聖和女子大学)